

農作物技術情報 第3号 花き

発行日 平成30年 5月31日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<http://i-agri.net/Index/gate002>」

- ◆ りんどう 適期定植、適期防除に努めましょう。
- ◆ 小ぎく 白さび病防除を徹底しましょう。

りんどう

1 生育の状況

- ・ 春以降、比較的温暖で適度な降雨もあったため、概ね平年を上回る生育となっています。
- ・ 病害虫では、一部圃場でリンドウホソハマキの発生が確認されています。
- ・ 育苗は、各地域ともほぼ順調に進み、6月上旬から本格的に定植が始まる見込みです。

2 圃場管理

- ・ 株仕立て作業は、株当たり8~10本を目安とし、草丈30cm頃までに終えるよう計画的に進めます。
- ・ 5月下旬から6月は茎葉が最も伸長する時期で、水分や肥料を多く必要とします。肥料の吸収には土壌水分が必要なので、土壌が乾燥した都度かん水を行います。ただし、30℃を越えるような高温時のかん水は、根に高温障害を発生させる可能性があるため避けるとともに、通路の長時間滞水にも注意します。
- ・ 圃場の乾燥が続くと、葉先枯れ症状が発生しやすくなります。例年葉先枯れがみられる圃場では、かん水を徹底するとともに、生育初期からの定期的な石灰資材の葉面散布により、発生の軽減を図ります。
- ・ 圃場内及び周辺の雑草は、ハダニ類やアザミウマ類の繁殖場所となるので、畦畔の草刈りや通路の除草を早めに行います。また、通路の防草シート設置や除草剤の利用など、できるだけ手除草や機械除草を減らす工夫をします。

3 施肥管理

- ・ 基肥としてりんどう専用肥料を用いた場合、追肥時期の目安は側芽発生期（葉の付け根に腋芽が発生する時期）となります。北上市付近における平年の側芽発生期は、早生種で5月下旬から6月上旬、晩生種で6月中旬から下旬ですが、気象経過による年次変動が大きいので、圃場を観察して適期に施用します。
- ・ 定植時に「りんどう定植2年肥料」を用いた場合は、基本的に2年目の施肥は不要です。

4 畑づくり～定植

- ・ 天候を見ながら計画的に畑づくりを進めます。堆肥は完熟したものを用品ですが、熟度に不安

がある場合は、早めに施用し土と混和しておきます。

- ・ 排水不良圃場では、明渠や排水路の設置等対策を講じます。定植年の生育状況が2年目以降の生育に大きく影響するので、排水対策はとても重要です。
- ・ 作畦後、土壌処理タイプの除草剤処理により、一定期間雑草の発生を抑えることが可能です。
- ・ 定植に適した苗は3～4対葉です。老化苗定植とならないよう計画的に定植作業を進めます。また、ジベレリン処理を行った苗は、苗の軟弱徒長を防ぐため、遅くとも処理後2,3日以内に定植します。
- ・ 晴天時の定植では、セルトレイを長時間直射日光下に置かないよう注意します。また、抜き取った苗をマルチ上に置かないようにします。
- ・ 定植後は植え穴へ十分量をかん水し、床土と苗をなじませます。初期生育を促すために、薄めの液肥を水代わりにかん注する例もみられます。定植から1ヶ月程度は乾燥に弱いので、その間は特にかん水に留意します。

5 病害虫防除

(1) 葉枯病

今のところ、全県的に発生は少ないようです。ただし、例年梅雨入り後に拡大する傾向がありますので、定期的な薬剤散布によって予防防除に努めます。

(2) リンドウホソハマキ

県内全域で越冬世代の羽化が確認されています。成虫、幼虫の潜葉痕及び頂部の食害が認められたら防除を開始します。



成虫(体長5～6mm)

孵化幼虫の潜葉痕

(3) ハダニ類

一部地域で発生が確認されています。下葉の裏の寄生状況を観察し、発生を見たらに防除を開始します。ハダニ類は薬剤抵抗性を獲得しやすいので、同系統の薬剤は年1回の散布とします。併せて、発生源となる雑草の防除も行います。

小ぎく

1 生育の状況

- ・ 冬期間の低温により、8月咲品種を中心に挿し穂の不足や育苗の遅れがみられました。そのため、一部地域で定植苗の不足や定植作業の遅れがみられました。
- ・ 9月咲品種については、現在育苗中のところが多く、順調に生育しています。苗の数も概ね確保されています。
- ・ 病害虫では、採穂用親株の白さび病とべと病の発生が例年よりも多く、一部地域では本畑でも発生が確認されています。これは、苗からの持ち込みによるものと考えられます。

2 定植後の管理

- ・ 乾燥が続く場合は、適宜かん水を行います。
- ・ 整枝（株仕立て）は、側枝の長さが20～30cmの頃に行います。株当たり3本残して他の枝は除去しますが、草勢の強い品種では4本仕立ても可能です。残す枝の判断については、強い枝を残すと他の枝の生育が悪くなるので、できるだけ生育の揃った枝を残すようにします。
- ・ 無マルチ栽培の場合は、土寄せを行い生育の促進を図ります。側枝が10cm程度伸びた頃と、整枝を行ったあとの2回が実施時期の目安です。

3 病害虫防除

(1) 害虫

一部地域で、本畑において苗からの持ち込みと思われるハモグリバエ類の発生が確認されています。薬剤防除のほか、発生初期であれば被害葉の除去が有効です。

また、今後はアブラムシ類、アザミウマ類及びハダニ類の発生が問題となります。発生状況の観察に努めて早期防除に留意するとともに、発生・増殖源となる雑草の防除を行います。

(2) 白さび病

キク栽培において最も重要な病害です。育苗期に発生した場合、苗からの持ち込みによって本畑でも発生しやすくなるため、採穂用親株からの定期防除が必要です。薬剤の選定は各地域の防除暦等を参考としますが、発生状況に応じた「予防剤」と「治療剤」の適切な使い分けが重要です。



小ぎくの白さび病（葉裏）

(3) キクわい化病

わい化病に感染した株は治癒する可能性はなく、治療薬もありません。圃場に残すことで他の株の伝染源となり、また、親株として使用した場合は挿し穂に伝染するので、見つけ次第抜き取り処分します。

春の農作業安全月間実施中！ [4月15日]
[~6月15日]
農作業 ころのゆとりで 事故防止

次号は6月28日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

中央農業改良普及センター県域普及グループは、地域農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。